エッセイ

人間にとって音声コミュニケーションはご飯を食べるのと同じくらい大切なもの

坂本真一

株式会社オトデザイナーズ

新型コロナウィルスの問題が始まってから、私たちの社会から音声コミュニケーションが激減しました。人と人が対面で会話することは“悪”とされ、数少ない機会もマスクやフェイスシールド、飛沫防止シートに阻まれての会話となっています。

しかし、実は、対面での音声コミュニケーションを忌避する傾向は、コロナ問題よりもずっと以前から始まっていました。私自身のビジネスの中でも、取引先企業の多くが、顔を合わせて話すことを避ける傾向にあることを強く感じていました。仕事後にお酒を飲みに行かなくなったというのは、もう当たり前ですが、仕事に関する打ち合わせすら、出来る限りメールで済ませたいという雰囲気が、徐々にですが、確実に強くなっていました。

ある哲学者の方が仰っていたのですが、「対面でのコミュニケーションはリスクである」と考える人が、20年くらい前から急激に増えているそうです。人と会うと情報を盗まれるかもしれない、パワハラやセクハラなどのハラスメント行為が発生するかもしれない、感情的になって暴力沙汰が起こるかもしれない、そして感染症をうつされるかもしれない、しかも交通費や食事代がかかる・・・確かにリスクという観点のみで見れば、人に会わない方がこれらのリスクが低いのは当然でしょう。

一方で、人間は、他者とコミュニケーションを取らなければ生きていけない生き物です。もちろん、メールやSNSなどのテキストベースのコミュニケーションで一部を代替えすることは可能です。オンラインコミュニケーションで、相手の姿を見ながら会話することも、今は簡単に出来るようになりました。

しかしこれらは、あくまで“代替え手段”です。コミュニケーションは、相手と相対して同じ空間に存在し、相手の物理的な大きさを感じることから始まると言われています。大きい人も象のように大きいわけではなく、小さい人も蟻のように小さいわけではない。自分と同じ大きさのカテゴリーにいることを確認し合うことからコミュニケーションが始まります。そして、その場所や相手の匂い、身振り手振りから発せられる小さな音、肌で感じる息づかいなどから、相手の存在を感じ、そこに音声コミュニケーションと視覚的な要素が加わって、人と人は信頼関係を築き、友情や愛情が生まれ、それを醸成していくことが出来るのです。

表題の言葉は、ある高名な聴覚心理学の先生とお話ししている時に、その先生が仰っていた言葉です。「人間にとって音声コミュニケーションはご飯を食べるのと同じくらい大切なもの」なのであれば、新型コロナウィルスの問題が始まってからの我々は餓死寸前の状態に追い込まれていることになります。

（私はテレビをほとんど見ないので、人から聞

長野医療衛生専門学校
〒386－0012　長野県上田市中央2-13-27
info@nagano-iryoueisei.ac.jp

いた話ですが）若者や子供を、まるでウィルスの媒介者のように扱っているテレビのニュースや情報番組が多くあるそうですが、一方で、自粛の影響でメンタルをやられてしまったり、嗄声になってしまった学生や子供たちがたくさんいます。

今の学生たちの多くは、私の時代の学生たちよりも、本当に真面目で、大人が定めたルールを（根拠が曖昧であっても）良く守ります。抗議活動、反対運動やデモ行為などは決して行いません。そして、大人よりも真面目に真剣に自粛をし、結果として上記のような状態になってしまっている学生が大量に発生しています。

「音声コミュニケーションはご飯を食べるのと同じくらい大切なこと」という言葉が、こんな悲しい形で立証されてしまっているのが現状です。テレビのニュースや情報番組というものは、視聴率さえ取れれば、そんな学生たちさえも悪者扱いするのです。酷い話です。

本稿が皆さんの目に触れる時期に、コロナウィルスがどういう状況になっているかは分かりません。しかし、どんな状況になっていようとも、今後は、感染予防対策と同時に、対面による音声コミュニケーションを失わない方策を考え、実行すべきと考えています。心身の健康は、しっかりとした食事を取り、適度な運動をし、そして対面による音声コミュニケーションを行うことによって成されるからです。

医療や介護の現場は、音声コミュニケーションが最も必要とされる現場のはずです。これらの分野のプロフェッショナルを養成する長野医療衛生専門学校には、学生たちも交えて、この問題について大いに語り合って行ってほしい。これからの時代を創って行く学生たちに「人間にとって音声コミュニケーションはご飯を食べるのと同じくらい大切なもの」だということを、強く感じていて欲しいと願っています。

私自身も、こんな思い、想いから、年配者と若者のコミュニケーションが少しでもスムースになるように、「想いやりトーク」という、採算度外視でのアプリと動画の無料配信活動を続けています。本当に少しずつですが、想いやりトークの輪が広がって来ています。今の危機的状況に気付いている人が、他にもたくさんいるのだと実感できています。私は、音響学、音声学、聴覚心理学の専門家です。今までも、これからも、（どこまでが真実なのかも分からない）専門外のニュースや情報に右往左往するのではなく、自分の専門分野の中で、この国のために出来ることをして行きたいと考えています。

受理日：２０２２年３月２３日